

宮城県図書館蔵猪苗代兼如増注『源氏物語抄（紹巴抄）』について

妹尾好信

【キーワード】 源氏物語、里村紹巴、猪苗代兼如

はじめに

連歌師里村紹巴が称名院三条西公条の『源氏物語』講釈を聴聞して著した『源氏物語抄』（紹巴抄）^①ととも、二十巻は、早く古活字本が出版され、後にその版面を覆刻利用しつつ、一面十行を十一行に改編して漢字の読みや漢文の訓点を付した整版本が作られたことが知られる。最も流布したのは整版本であるが、同系統の本文を持つ写本もある。

一方、この流布本系統とは別に、紹巴に師事した猪苗代兼如が注釈を増補した写本が存在することも報告されている。最初に報告されたのは稲賀敬二先生御所蔵の写本（横本二十冊。現在は安田女子大学附属図書館「稲賀文庫」所蔵）^②で、同本は「^①刻平安文学資料稿」第二期に全十冊で翻刻されている。^②兼如による注の書き入れや巻末への注の追加が見られるほか、ほとんどの巻の末尾に永禄七年（二五六四）四月から翌八年（二五六五）三月までの書写奥書を有す

ることが特徴である。

その後、この本と同類の兼如増注本がほかにも存することがわかってきた。小川陽子氏^③は、①稲賀先生蔵本の他に、②鶴見大学附属図書館本と③宮城県図書館伊達文庫本の二本の存在を紹介され、各本の本文や書き入れ注の相違などを検討されて、流布本との関係も視野に入れ、『紹巴抄』の初稿本から再稿本への展開とその背景、兼如増注本作成の実態などについて詳細な考察を加えられた。その結果、従来の説とは異なり、増注された兼如本の方が初稿本をもととしており、版行された流布本は紹巴による再稿本が祖となって成立したと考えられると言われた。兼如増注本のもとになった本は、彼が奥州に下った天正七年（一五七九）四月以前に紹巴から得たものであるが、その直後の同年六月から紹巴は新たに『源氏物語』の講釈を開始し、それと並行して『紹巴抄』の増補も行ったのだろうと小川氏は考えられた。そして、文禄初年頃までの間に、奥州仙台において兼如は、弟の正益の説も取り入れながら独自に『紹巴抄』

の増注を行ったと推測されたのである。複雑な各本の奥書や注釈の出入りを慎重に吟味しながらの考証には説得力があり、首肯できる見解であろうと思う。

①稲賀先生蔵本は兼如自筆と見られるという⁴。もともと奥州の某寺旧蔵だった由なので、伊達家から流れ出た本である可能性がある。②鶴見大学本は『一誠堂古書目録』第59号（昭和58年12月）に掲載された「江戸初期承応明暦頃写、卜部吉田家旧蔵」とある本である。③伊達文庫本について、小川氏は、『補訂版国書総目録』『古典籍総合目録』に記載がなく、未紹介の一本である。全十八冊で、第三・四冊（未摘花く花散里）を欠く。兼如の巻末追加注を一部に有することから、右二本と同系統に属するといえる。「伊達伯観瀾閣圖書印」があり、遅くとも明治十〜二十年以前より伊達家に伝えられた一書と知れる」と解説する。『宮城県図書館蔵伊達文庫目録』（昭和62年 宮城県図書館）に掲載されているから、存在が知られていなかった本ではない。同目録には次のような記載がある（原文横書き）。

2805 源氏物語抄 20巻 D913.36-44

（巻3、4 欠）

里村紹巴著

寫本

18冊 15.5×22.5㎢

印記・伊達伯観瀾閣圖書印

本来二十冊本だったはずの第二・三冊を欠く零本である。兼如の

増注は彼が仕えた仙台伊達家においてなされたと考えられるので、主家に伝来した本であることを思えば兼如増注『紹巴抄』の正本とも言うべき貴重な本である可能性もある。保存状態もよく、きちんと清書された本という印象がある。

早く大津有一氏が、池田亀鑑博士編『源氏物語事典』下巻（昭和35年 東京堂出版）所収「注釈書解題」の「紹巴抄」の項目において、徳島光慶図書館旧蔵本と青谿書屋蔵『源氏物語之抄』には稲賀本と同様の巻末書写奥書がある旨記している。「徳島光慶図書館旧蔵本は空蟬、夕顔、若紫の三巻だけであったが、戦災で焼失したかと思われる」というが、戦災か昭和二十五年の失火かのどちらかで失われたのだろう。青谿書屋本も所在不明だという。あるいはそれらも兼如増注本であったかも知れない。光慶図書館本の巻区分は、兼如増注本の第二冊に等しい（流布本の第二冊は空蟬・夕顔。小川氏論考に巻区分の相違について指摘がある）。小川氏が、「東海大学付属図書館桃園文庫に、大島本から奥書や巻末注など一部特徴的な部分のみを転写した新写本が所蔵されている。それによれば紹巴奥書ならびに兼如の巻末追加注が見えることから右二本と同系統の一本と目されるが、詳細は不明である」と言われる桃園文庫本は、この青谿書屋旧蔵本（すなわち大島本）からの抜書の可能性が高いと思われる。これら二本は残念ながら現在見ることができない。兼如増注本の伝本は①②③の三本のみということになるのだろうか。

ところが、実は、宮城県図書館には『源氏物語抄』がもう一本所

蔵されており、これが明らかに兼如増注本『紹巴抄』なのである。ただし、残念なことに桐壺・箒木巻の一冊のみの零本である。

同本は、先に掲げた『伊達文庫目録』ではなく、平成三年に同図書館が刊行した『宮城県図書館和古書目録』に掲載されている。次のようにある(原文横書き)。

4798 [源氏物語抄] 残巻 M9133-41

(存桐壺、箒木)

里村紹巴著

寫本

1冊 158×218㎜

書名が「」に入れられているのは、外題・内題ともになく、内容によって判断された書名ということである。『伊達文庫目録』に収められていないので、一見伊達家伝来の本ではないようだが、巻首に「宮城県図書館／伊達文庫」の朱印があるから、やはり本来は伊達文庫に属する本らしい。ただし、「伊達伯観瀾閣圖書印」の印記はない。宮城県図書館のホームページ上にあるデジタルアーカイブ「叡智の森Web」内で画像公開されているので、容易に見ることがができる。冒頭の一冊のみではあるがこの本には奥書もあって興味深い情報が得られるので、本稿では、この本の紹介を中心に、他の兼如増注本との本文異同について報告したいと思う。

一 伊達文庫本『源氏物語抄』二本の書誌

『伊達文庫目録』に載る十八冊本を仮に伊達文庫A本、『宮城県図書館和古書目録』に載る一冊本を伊達文庫B本と呼ぶことにする。最初に、A・B両本の書誌を記す。

○A本

写本十八冊。楮紙袋綴。縦一五・七cm、横二二・八cmの横本。表紙は薄藍色無地の紙表紙。保存状態は良好である。一面10行書き。本来全二十冊のうち、第三・第四冊(未摘花・花散里)の二冊を欠く。巻首に「伊達伯観瀾閣圖書印」と「宮城県図書館／伊達文庫」の朱印を捺す。外題・内題ともなし。表紙には冊番号と所収の巻名を記した目録題簽を貼る。題簽による各冊の巻名は次の通り。

- 第一冊 桐壺・箒木
- 第二冊 うつ蟬 ゆふかほ 若紫
- (第三冊・第四冊 欠)
- 第五冊 須磨・明石・みをつくし
- 第六冊 蓬生・関や・繪合
- 第七冊 薄雲・朝かほ・乙女
- 第八冊 玉かつら・はつね・こてふ
- 第九冊 ほたる・とこ夏・か、り火
- 第十冊 野分・みゆき・藤はかま・まき柱

第十一冊 梅かえ・藤のうらは

第十二冊 若菜上（※巻末に「若菜上終」とあり）

第十三冊 わかな下

第十四冊 柏木・横笛・鈴むし・夕霧（※巻末に「夕霧ノ注終也」とあり）

とあり）

第十五冊 御法・まほろし・匂宮・紅梅・竹河（※巻末に「竹河

ノ注是迄也」とあり）

第十六冊 橋ひめ・しゐかもと（※巻末に「此注終也」とあり）

第十七冊 あけまき・さわらひ（※巻末に「早蕨ノ注是迄也」と

あり）

第十八冊 寄木

第十九冊 あつまや・うき舟（※巻末に「東屋ノ終也」とあり）

第二十冊 蜻蛉・手ならひ・夢浮橋（※巻末に「此注終也」とあり）

○B本

写本一冊。楮紙袋綴。縦一五・九cm×横二一・九cmの横本。表紙は藍地に金泥で水草模様を描く。保存状態は悪くないが、やや疲れが見られる。外題・内題ともなし。一面14行書き。墨付66丁。本来全二十冊のうち第一冊（桐壺・帚木卷）のみ存。巻首に「宮城県図書館／伊達文庫」の朱印を捺す。桐壺巻末に「天正十五霜廿七一校之」、帚木巻末に「天正十五霜廿九暁一校一本」（抹明）／臨江齋紹巴法眼／是齋兼如法橋」との奥書あり。

二本ともほぼ同じ大きさの横本である。A本には（ ）内に記したように巻末に簡略な識語のある冊がある。一方、B本で注目されるのは、巻末の奥書である。

桐壺巻の巻末（28丁裏）に、

天正十五霜廿七一校之

とあり、帚木巻の巻末には、

天正十五霜廿九暁一校一本

と書き、二行分ほどの空白を置いて、

臨江齋

紹巴法眼

是齋

兼如法橋

と署名がある。すべて本文と同筆である。天正十五年（一五八七）十一月二十七日に桐壺巻の校合を済ませたこと、翌々日の二十九日に帚木巻の校合を終えたことを記す。「一本」とあるのは、それが本奥書だというのであろう。「本」の字の下には二字分くらい刷り消して抹消した形跡があるが、書かれていた字は判読できない。

紹巴と兼如の名が並んで一筆で記されているが、これはもちろん本来は別筆で別個に書かれたものであるはずである。紹巴の署名があった本におそらくは増注を施した後に兼如が署名を添えたのだろう。それは天正十五年霜月のことかも知れないし、もっと前かも知れない。校合の日を記す奥書は、両者の署名がある本を書写した人

物が記した可能性もあろう。ただし、天正十五年は、兼如が奥州に滞在していたと見られる時期に重なる。天正十五年の十一月から兼如は仙台において自らが増注した『紹巴抄』を書写し校合する作業を始めたと考えてよいのではないかと思う。それは主君である伊達政宗の命であったかも知れない。

稲賀先生蔵本には、先述の通り、永禄七年四月（夕顔巻）から同八年三月（夢浮橋巻）までの書写奥書がほぼ各巻末に存在するのだが、それに加えて、紅葉賀巻の末尾には、

天正十六年正月九日一類礼三つどふ日幽々終功了

という朱筆の奥書があり、次の花宴巻末にも、年次はないが、

三月二日功了

というやはり朱筆の奥書がある。これもおそらく天正十六年（二五八八）の三月だろう。そして、夕霧巻末尾には、

兼如私ニ云、文禄二年正月廿六日一部之書写此卷ニテ終功

という奥書を記している。文禄二年（一五九三）は、天正十六年の五年後にあたる。このことについて稲賀先生は、「朱書された天正十六年の方は兼如の書写に關するものか」と推測され、「兼如は天正七年下国の時、再稿本の全部を書写し終えることができず（天正十六年にも「紅葉賀」などを写して）、文禄二年（一五九三）正月、機会を得て残りを書写し終えたと見てよい」と言われた。これに対し、小川氏は、兼如が奥州下向にあたって紹巴から得たのは再稿本ではなく初稿本であったはずであり、「天正十六年、文禄二年とは、兼

如がすでに書写していた『紹巴抄』を再度奥州の地で転写した年次と考えられないだろうか」と言われ、「やはり料簡にあるごとく天正六年に兼如がまず書写し、それを天正十六年から文禄二年頃に自身の手で転写したと見るべきではないか」「稲賀氏によれば、御架蔵本には付箋がさまざま貼られており、それが本文化した注記もあるという。それは、兼如が折に触れて新たな注を付箋に記していたのを、ある時点で本文に還元したことを意味していよう。兼如が再度転写した理由は定かでないが、その本文化の作業こそが天正十六年、文禄二年の書写に連動するものであったかもしれない」と考察されている。兼如は天正七年（二五七九）四月頃に仙台へ下り、その後天正十九年（二五九二）春あたりまで奥州に滞在していたと考

えられるので、稲賀先生の推定のように京都出立時に書写し残した『紹巴抄』を何らかの機会を得て天正十六年に紅葉賀巻などの追加書写ができたという状況は考えにくいと思われる。おそらく稲賀本紅葉賀巻末にある天正十六年正月九日と花宴巻尾の三月二日の朱筆奥書は奥州における兼如の書写に關する年次を示しているのだろう。そして、年次の近接具合から見ても、伊達文庫B本にある桐壺・箒木両巻末尾の天正十五年十一月下旬の奥書もそれと一連の書写作業の進行を表すものではないかと考えられる。天正十五年十一月二十七日に桐壺巻、同月二十九日に箒木巻、翌年正月九日に紅葉賀巻、三月二日に花宴巻の書写を終えるという進行状況であったのだろう。稲賀本夕霧巻末にある文禄二年正月二十六日の奥書は紅葉

賀・花宴両巻の朱筆奥書とは異なり墨書のようなので、これとは別次元の書写に関わる年次なのではないかと思う。伊達文庫A本の奥書が、天正十五年から十六年にかけて仙台伊達家において『紹巴抄』の書写校合が行われていたことを示すならば、政宗の時代の伊達家において猪苗代家の人々が担った文事の一つが明らかになるわけで、実に興味深いものがある。

なお、小川氏は、兼如増注本系統の『紹巴抄』に、兼如の説を示すと見られる「兼私」注の他に、「正私」とある注が散見することに注目され、「正」とは兼如の弟の猪苗代正益のことであり、「兼如被注本を正益が写して注を加えること、さらにその正益注を兼如が参看して自身の本に手を加える」ことがあったことを物語っているのだらうと推定された。

稲賀本では、桐壺・帚木両巻に「正私」注はないようだが、小川氏によれば、稲賀本で単に「私」とある注が鶴見本では「正私」となっている例があるようだ。小川氏の引用をそのまま引かせていた

だ。

▽稲賀 私順徳院の御代ヨリ此事無ト也〔桐壺129、注末尾割り注〕

（伊達本は紹巴注のみ）

鶴見 正私しゆんとくゐんのみより此事なきと也〔注末尾書き〕

この箇所注は、伊達文庫B本ではA本（小川氏の言われる「伊達本」）と同様紹巴の注のみで、「私」注も「正私」注もない。ここだけ見

るとB本は伊達文庫A本と比較的近い本文を持っているようであるが、B本は桐壺・帚木巻の一冊だけしかないもので、以後の巻で「私注・正私」の実態がどのようになっているかは知るすべがない。

二 稲賀本・伊達文庫A本とB本との間の項目異同

ここで、伊達文庫B本と稲賀本・伊達文庫A本との間の項目異同を掲げる。稲賀本は「翻平安文学資料稿」第二期（昭和51年〜61年 広島平安文学研究会）に項目番号を付して翻刻されているので、その翻刻本文を利用して、稲賀本を基準にして伊達文庫A本・B本の異同を掲げるといふ形式にする。

〔桐壺巻〕

○12めをそはめ（欄外ニ「みもてなし、みおほえ、み心はへ、みうろしみ」ト）

↓A本・B本 12「目をそはめ」項目の次に、「みもてなし」「みおほえ」「み心かへ」「みうしろみ」の項目を立てるが、注釈文はなし。

○20みかたち也

↓A本・B本 この項目なし。

○26見えし・27あらざりき

↓A本・B本 項目逆順。

○37まさなき・38をくりむかへ

- ↓A本・B本 項目逆順。
- 41さうし
↓A本・B本 この項目なし。
- 59むなしき御から
↓A本・B本 項目見出しを「むなし御から」とする。
- 65給ひしか・66さまあしき・67心はせ・68すけなふ
↓A本・B本 項目順「さまあしき・すけなふ・給ひしか・心はせ」。
- 81ためらふ
↓A本・B本 この項目「77内侍の」の次にあり。
- 95かたくなに
↓A本・B本 項目見出し「かたなに」とする。
- 118大液の――
↓A本・B本 この項目注釈文なし。
- 145人の御さま也
↓A本・B本 項目見出し「人の御」とする。
- 191いしたて、
↓A本・B本 注釈文中の「清涼殿東廂也」を項目のごとく1字分高く記す。
- 196御そたてまつりかへて
↓A本・B本 注釈文中の「権記ノ心ハ」を項目のごとく1字分高く記す。
- 224こゝら
↓A本・B本 前項目「223五六日」の注釈文に続けて記す。そして、次に「おほなく」の項目あり。
- 〔簞木巻〕
- 冒頭
↓A本・B本 文中の「あるとみえて」を項目のごとく1字分高く記す。
- 23かしこまりもえをかす
↓A本・B本 前項注釈文の末尾に続けて記し、項目としない。
- 74宮つかへに・75はふかす
↓A本・B本 項目逆順（75項目「はふかる」とする）。
- 237あへましは
↓A本・B本 前項注釈文の末尾に続けて記し、項目としない（ただし、B本は「あへましは」の右肩に小さな丸印を記す）。
- 273七とせ
↓A本・B本 注釈文中の「櫛樟七年而…」を項目のごとく1字分高く記す。
- 303ほうけつき
↓A本・B本 この項目の次に「くすしからん くすみたる心也」の項目あり。
- 333君達あさまし
↓A本・B本 前項注釈文の末尾に続けて記し、項目としない。

○389 何よけん・390 わらはなる

↓B本はこの2項目を1字下げて注釈文の高さに記し、1字上げる指示をする（390はA本・B本とも「わらはなる殿上の」を項目とする）。

○473 さるへき事は

↓A本・B本 この項目なし。

○488 又も給へり

↓A本・B本 この項目なし。

○510 いとくおし

↓A本・B本 項目見出しを「いとおし」とする。

以上の通りで、項目の出入りや配列の違いを見ると、稲賀本に対して伊達文庫A本・B本が共通して対立する例がきわめて多いことがわかる。基本的にB本はA本に近く、稲賀本には遠い関係にあると言える。では、A本とB本の間にはどのような違いがあるのだろうか。もう少し詳しく本文の違いを見ていく。

三 伊達文庫A本とB本の本文の違い

伊達文庫A本とB本の間に見られる特徴的な本文異同として、B本にない注がA本には行間に補入した形で書かれていることがある。箒木巻の注釈に顕著である。次のような例がある。稲賀本の項目番号とともにA本の本文状況を記す。

○222 えんなる

項目の後の行間に「私すこきことのはあはれなる哥をよみ置の首尾也」と小書きされている。B本にはなく、稲賀本にもない。

○260 こと音も哥

末尾に、「一葉抄二芦間になつむ舟そえならぬはた、ならぬ心也えならぬ花はいはれすおもしろき也又縁ならぬはよせもなき心也」と行間小字書き入れがある。B本にはなく、稲賀本にもない。

○265 さうのこと

見出しの左脇に引き出し符号を付け、「一葉しやうとよむへし」と行間書き入れがある。やはりB本にも稲賀本にもない。この二例は、ともに『一葉抄』を引いている点で共通性がある。

一方、B本で補入本文になっている箇所がA本では正行の本文になっている例もある。

〔桐壺巻〕

○料簡

《B本》上部欄外に横向きに「黄表紙ハ俊成卿ノ本ト云也」と記す。

《A本》本行に「黄表紙ハ俊成卿の本と云也」とある。

（※稲賀本にも欄外に「ハ黄表紙は俊成の本云々」とある）

〔箒木巻〕

○202 手をおりて哥

《B本》「故伊勢物語」と行間補入。

《A本》本行に「作物語故伊勢物語上句其儘をけり」とある。

○413 いもうと

《B本》「弟ヲモ兄ト」と行間補入。

《A本》本行に「男子をは弟をも兄と系圖にはいもうと、あねをもかけり」とある。

(※このB本の補入部分、稲賀本にはなく、文脈が整わない)

これらを見ると、B本は本文上の不備を欄外に補入し、それを本文に取り込んでA本が書写しているように見える。もつとも、B本の箒木169「すみがき」の項には、上部欄外に「金岡ハ山十五重ヲタ、ム広高ハ」とあるらしい(裁断のためか上部が欠損していて判読できない)補入書き入れがあるが、A本はこの補入を取り込んでいない(稲賀本には補入部分の本文がある)から、すべてをきちんと取り込んでいないわけではない。

もしA本とB本の間に直接的な関係があるならば、A本の方が清書本ということになるが、両本間には巻末識語の有無をはじめ細かな本文異同がかなりあるので、直接の書承関係はなさそうだ。しかしながら、A本の体裁からは清書本らしい感じがすることは先述の通りである。A本はB本に近い本文を持った本をもとに書写された清書本であろう。ただし、清書後、A本は『一葉抄』を参照して注を追加しているということになる。

おわりに

本稿では、これまでに紹介されていない宮城県図書館蔵『源氏物

語抄』残巻一冊本を紹介し、それが兼如増注本系『紹巴抄』の展開を知るための貴重な資料である可能性を指摘した。兼如は天正六年の奥州下向に際し、師紹巴から『紹巴抄』の初稿本を与えられた。仙台においてそれに注を付加するとともに何度にもわたって書写・校合を行った。天正十五年十一月下旬からはじめた校合作業もその一環であったことが当該本の奥書から推測される。全二十巻のうち首巻一冊のみという零本なので情報は限られている。連れの十九冊がどこから発見されることを期待したいものである。

〔注〕

- (1) 稲賀敬二先生『源氏物語紹巴抄』と兼如―永祿奥書本資料―(金子金治郎博士古稀記念論集『連歌と中世文芸』(昭和52年 角川書店)。後、『源氏物語注釈史と享受史の世界』(源氏物語研究叢書4、平成14年 新典社)所収)。以下、特記なき場合、稲賀先生の御説はこの論考による。
- (2) 稲賀敬二先生他校『永祿奥書源氏物語紹巴抄』一、二、十九、二十(昭和51年〜61年 広島平安文学研究会)。
- (3) 小川陽子氏『源氏物語抄(紹巴抄)』の展開と享受―猪苗代家の関与を中心に―(『国語と国文学』平成19・4)。以下、小川氏の説はすべてこの論考による。
- (4) 稲賀敬二先生『猪苗代兼如書写・書き入れ本『源氏物語紹巴抄』―卜部吉田家旧蔵本と架蔵本と―(『古代中世国文学』第四号(昭

和59・8 広島平安文学研究会。後、注1掲出書所収。

(5) URL <http://eichilibrary.prefmiyagi.jp/eichi/dejital/3-60482-0>

〔付記〕本稿は、国文学研究資料館の基幹研究「日本古典文学における〈中央〉と〈地方〉」（平成二十五年度～二十七年度）による研究成果の一部である。宮城県図書館蔵本の調査および複製にあたっては、同館みやぎ資料室の佐尾博基氏に格別の御高配を賜った。また、国文学研究資料館には収蔵マイクロフィルムの複写について便宜を図っていただいた。記して御礼申し上げます。

**An Introduction about one of the Annotated Books
Genjimonogatari-sho (Johasho) of which Afterword
was Written by Inawashiro Kenryo Held in
Miyagi Prefectural Library**

Yoshinobu SENO

This paper introduces one remaining volume from *Genjimonogatari-sho (Johasho)* owned by the Miyagi Prefectural Library which had never been previously introduced and points out its potential to be an invaluable resource in order to understand the development of the original *Johasho* annotated by Kenryo. In 1578, Kenryo was given the first edition of *Johasho* by his master Joha when he went to Oushu; he added notes to this edition, copied it by hand, and proofread it repeatedly. As mentioned in the book's colophon, the proofreading process that began in late November of 1587 was supposedly part of this work.